

東日本大震災支援活動報告

(2011年3月24日～8月11日)

國島 康治 (NPO釜ヶ崎スタッフ)
(派遣時・就労部門、現在・シェルター部門)

NPO法人「ホームレス支援全国ネットワーク」の会議で、東日本大震災被災地への支援活動が決定されたのを受けて、3月24日から8月11日までの間、現地での支援活動を行った。

震災当日から仙台市内においては、現地のホームレス支援3団体（ワンファミリー仙台、仙台夜回りグループ、萌友）によって仙台駅、県庁周辺での炊き出し活動や、行政 etc からの依頼を受けた、被災地域にある福祉関係施設の安否調査と必要物資の搬送が行われていた。

当初は、通信手段が完全にマヒし、行政の側もまったく諸施設の安否確認すらとれていなかったが、安否確認活動の結果、完全に被災し他の施設に移った施設、一階部分は被災したが2階以上の部分に避難した施設、津波災害をまぬがれた施設がほぼ把握でき、各地の避難所と、こうした施設に対する物資の供給が、現地のメンバーや全国から駆けつけた人達によって連日行われていた。

〈3月24日 現地入りからメーデー参加による一時帰阪までの活動〉

やっと飛行機のチケットが取れたので、空路山形に飛び、そこからバスで仙台に入ることができた。

全国ネットの会議を受けて、①「全国ネット、グリーンコープの共同事業」を、②その拠点をワンファミリー仙台の事務所にするに従い、ワンファミリー仙台の事務所に11:00頃にたどり着いた。（その後、この共同事業に生活クラブ生協も加わり、また萌友もホームレス支援全国ネットに参加した）

その当時の仙台市内は、海岸線を除いては津波の被害もなく地震の被害も少なく、電気・水道も復旧していたが、JRも地下鉄も復旧せず、ガスも復旧しておらず、また流通もストップしたままだった。道路はバスとガソリンスタンド待ちの車で渋滞し、コンビニもファストフードも閉店し、開店している店に行列ができ、自動販売機もすべて売り切れ状態だった。（もっとも国分町は、しっかりとぎわっていて、私はここでお酒を買うことができた。）

この当時の共同事業体の方針は、「最も困難な生活をしている所（人々）に必要なものを届ける。（大きな避難所にはもうこの頃から物資が山積となっていたが、その先に届けていなかった）そのために単に物資や金を送るのではなく、それを届けるための車と人を現地に送る」だったと思う。

私が仙台に着いた頃は、震災後現地にいち早く駆けつけた人たちも2週間目となり、疲れがたまり、また一部は帰る時期だった。

また、グリーンコープからトラック2台と常駐者1名、そして埼玉市民キャビネットのメンバーもヘリコプターも含めて現地入りした。

現地での活動は、朝8:00に事務所に集合し、前日の打ち合わせにそって車に物資を積込む。その後、宮城県内の各地を回って夜9:00頃に帰って来て、11:00頃まで打ち合わせをして解散するとい

うものだった。

配送に行かない人間は、次の日のためにオニギリ作り、次々に届く物資の荷降しや区分け作業をおこなった。

私は、3月25日以後物資の配達の仕事を連日おこなった。25日には石巻から女川に行った、仙台市内から高速に乗って石巻河南インターを降りるまでは、道路がガタガタになっていること、成瀬奥松島以北が緊急車両以外は通行禁止になっていることを除けば、被災地に来ているという実感は、あまり感じられなかったのが、インターを出て一般道に出ると風景は一変する。

道路は、ガレキとヘドロでやっと一車線が通れるだけの状態で、道路わきには、津波にあった車両、船が重なりあっている、もちろん開いている店など一店もない。

脇道はもっとひどく、大きな船が道をふさぎ、家屋が倒れ所々冠水し通れない。

そうした所で、通れる道をさがして何とか目的地にたどり着き物資を届け、ニーズを聞いて次の日に届けるという作業だった。振り返って見るとこの頃の活動は、地図とつきっきりで何とか目的地に行き、物資を届けニーズを聞くのに精一杯で、現地の人と話もできず関係をつくるどころのさわぎではなかったような気がする。

しかし現地の人、リスのマークのついた目立つ車だったのもあってか、よく覚えていてくれて「毎日ご苦労様」とよく声をかけてもらった。また一方で復旧、復興に向けた動きを目にすることもできた。

道路が一日一日通行しやすくなっていくことで、ガレキの原野にどんどん電柱が立ち始めていくこと、道路沿いの商店の片づけが始まり、あまり津波の被害に合わなかった所では、店が開き始めていた。

この頃、帰ってきてからの会話も、各避難所からのニーズと合わせ「石巻のイオンが再開した、床はまだヌルヌルだけどかなり物資もそろっている。酒を買ってきた」とか「どここのコンビニが開いていてパンを買った」とか「ラーメン屋が開いていたが、残念ながらメニューが一品だけだった」とか言うことが話されるようになっていた。

また仙台市内も、地下鉄、JRが再開し、ガソリンスタンドも平常営業にもどり、ガスも復旧し、宿舎の移動（倉庫→寺→マンション）とも併せて4月下旬にやっと風呂にも入れ、洗濯もすることができるようになった。（ガソリンスタンドは、当初、ほとんど閉店していて開いている所も緊急車両のみそれも2,000円までの所が多かった。私も一日中ガソリンスタンドを廻り、ポリ缶にガソリンを買い廻ったこともある。）

4月下旬には、一回目の私の「送別会」が開かれ、「また帰ってきて下さい」の声に送られ、釜ヶ崎で毎年おこなわれてきた5月1日のメーデーの準備をするために、釜ヶ崎に一時帰阪した。

〈ゴールデンウィーク明から釜ヶ崎夏祭りまで〉

釜ヶ崎メーデーが終わった連休明け、私はふたたび仙台に赴いた。

「震災で生きのびた生命をつなぐ」ためのバタバタした1ヶ月半が過ぎ、復旧・復興が一定進み、仮設住宅の建設とそこへの移行が始まることで、「生きる」から「どう生活を再建するか」に移行した時期だ。

全国ネットは、①物資の配達、②事業の再生、③パーソナルサポートの三点に方針を定めて、事

務局体制を再編し現地対策本部も、海岸部に近い仙台市若林区の群山（仙台南部道路沿い）に移した。（今後の展開も含め、古川市に無料の倉庫、宿泊所も借りることができた。）

当初活動の中心だったワンファミリー仙台のメンバーは、炊き出しのメンバーを除いて、日常活動や新たに始まったパーソナルサポートサービスの活動を開始した。（共同事業体現地対策本部の最初の事務局長もここに派遣）

物資の配達に関しては、私と埼玉から来たメンバーが軸となり続けたが、仮設住宅への移行に伴い避難所が閉鎖されることに伴って、残っている避難所に対しては1か所週1回の配達に変更して、週5日～6日別々の避難所に配送した。

事業の再生については、石巻市の倉庫の片づけ、ハマグリ浜の養殖事業の手伝い、浜の片づけ、寺の片づけをして亘理町の施設への介護士の派遣（これはグリーンコープのメンバー）のためのボランティアの派遣である。

パーソナルサポートについては、ワンファミリー仙台のメンバーを中心に、連日避難所を廻り炊き出しなどの催しを行っていて、これへのサポート物資の提供を行った。

こうした中で、釜ヶ崎からは、私の他にもNPO釜ヶ崎から特掃（高齢者特別清掃＝就労部門）のスタッフがのべ4名、事業再生の作業に加わった。また、こどもの里や野宿者ネットワークのメンバーも仙台に来て活動した。さらに私の知人たちも、たぶん現地の他のメンバーは、釜から来たと思っているのではあろうが、数名この作業に加わり、1週間交代で来るグリーンコープの2～4名のメンバーとともに、他のボランティアもふくめた活動の中心となっていた。中でも7月1ヶ月現地にいた千葉から来た私の知人は、週がわり日がわりのボランティアたちのいわば棒心として活躍してくれた。

同時に飯場に対する調査活動も開始した。仙台では、釜ヶ崎を本拠にして成長した大手人夫出し業者が飯場をつくり、また他の飯場もどんどん出来はじめている、現地の新聞ではタコ飯場の実態が報道されており、岩手ではヤクザが派遣法違反で逮捕されている。仙台夜回りグループの「食事会」では、名古屋で手配されて被災地の飯場で働いていた仲間の相談を受け、賃金未払いを解決することができた。

〈最後に〉

4ヶ月半にわたった私の仙台での活動はとても有意義なものであり、それを支えてくれたNPO釜ヶ崎に感謝しています。

3.11がなければ決して会うことができなかった、現地にかけて更には移住した仲間、そして被災した現地の人達との交流、こうしたまったくちがった人たちとの交流はとても大事なものでした。さらには、現地にかけてはできなかったとしても、現地を想いカンパを送った人達、こうした全ての人々は、「生きるとはどういうことなのか」、「人と人との関係はどうあるべきなのか」ということを再度考えはじめています。

最後に印象に残った2人の言葉を記します。1人は、亀田興毅です。彼はボランティアで炊き出しをおこなった際に、インタビューでこう答えています。「こまった人がいるのだからあたりまえやないか」そしてもう1人はハマグリ浜の区長さんで「前は人より大きな家に住み、人よりいい生活

をしたかったが、今は大きな家などいらない。安心して暮らしたい」これは、私たちが「安心して働き生活できる釜ヶ崎を！」という私たちの想いと同じです。

私は正直、最初仙台行きにあまり乗り気ではありませんでした。阪神大震災の時も東京に居て、生活上のこともあって現地には行けませんでした、仙台に着いた時も、会議で「私は、ボランティアに来たのではありません！」とえらそうに宣言しました。

しかし、現地で活動するうちに、行政の末端の職員やかけつけたメンバーや被災地の人達と接することで、ちがう視点から物が見えるようになりました。たしかに行政はデタラメな対応も多いと私は思っていますが、現地では行政の職員も必死で活動をしていました。

「行政糾弾」と、あの場所でさげんでも何の意味もありません。

ボランティア＝義勇軍と位置づけて活動することによって、行政との関係もあきらかになるのではないのでしょうか。

ともあれ、私の活動は終了しました。

今後も釜ヶ崎で、被災者支援の活動を継続していくことが必要だろうと考えています。

「カキが出来たら、ぜひ食べに来て下さい、連絡します！」という現地の人を忘れずに。

最後に、2度にわたる釜ヶ崎からの自転車、とても喜ばれました。「新品ではありませんが、釜ヶ崎のホームレスの人たちが自立に向けて直したものです」という言葉をかならず話して渡してきました。